



川^{かわ}にまつわる民話^{みんわ}・うた^{うた}・人^{ひと}

川かわにまつわる言い伝えつたえ その一

「大根川」

むかし、秋の末のころ、一人の女が、川で大根を洗っていた。

すると、そこへ旅のお坊さんが通りかかった。
お坊さんは、「一本、大根を恵んでくれんか」と、声をかけた。

土のついた大根を、
水は、いらぬなら
僧空海

女は、土のついたままの大根を、
ぽんとお坊さんに投げつけた。
すると、急に川の水が枯れて、
流れなくなってしまった。
女の足もとに、紙きれが落ちていた。



……今でも、秋になると、川の水量が急に少なくなるのです。不思議！

「石の舟」

北郷町の宿野というところに、石の舟が沈んでいるという泉がある。

大むかしのこと、海幸彦、山幸彦のふたりの神様がいた。

ふたりは兄弟で、兄さんの海幸彦は、

つりがたいそう上手で、

毎日毎日、海に出て魚をつっていた。

弟の山幸彦は、山へ行って、

鳥やけものをとって暮らしていた。

さて、海幸彦は、大きな石の舟を作った。

それから山幸彦が、海の底に住む豊玉姫から

もらった「まんじゆの玉」を海に投げると、

大きな潮が満ちてきた。

すると、石の舟は、ぽかりと浮かび、

ゆらりゆらりと波に乗った。

こうして、海幸彦は、弟の山幸彦に別れを言って、

船出をした。舟はいそづたいに南に進み、

ある奥深い入り江に入っていた。

この海幸彦に乗せた石の舟の着いた

ところが、北郷町の宿野であったという。



潮獄神社でおまつりしている
神様のことを刻んであります。



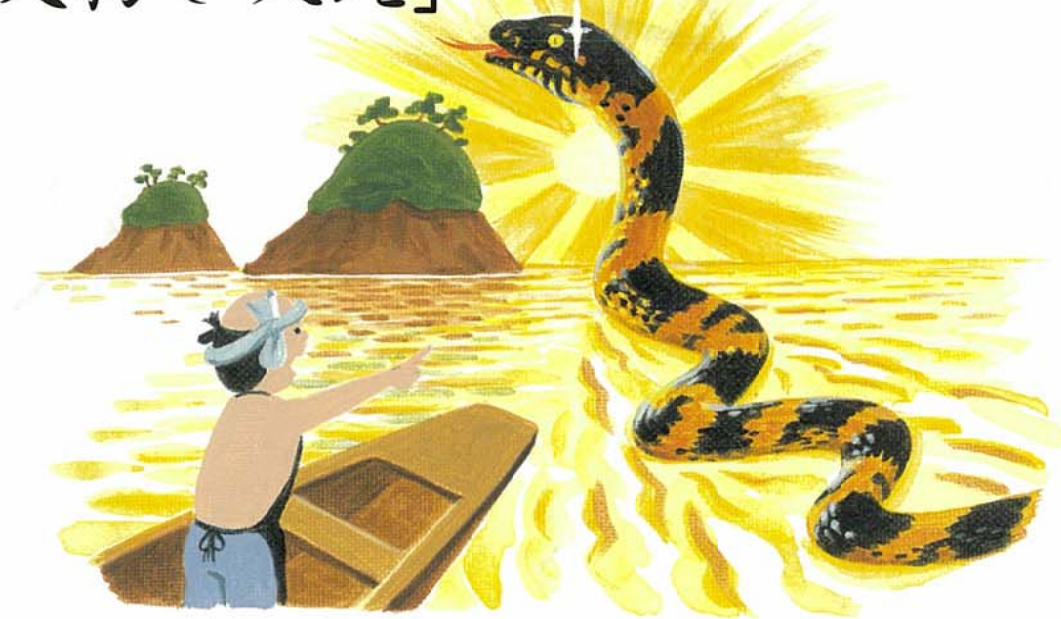
そのあとに建てられているのが潮獄神社で、
お社にある泉には、今も石の舟が沈んでいると言われる。

ここに踊りつがれている、みこ舞には、
この言い伝えが歌い込まれている。

潮獄神社のことは、
P.108ページにも
のっているよ！
地図もあるよ！

川かわにまつわる言い伝え

「天てん狗ぐと大だい蛇じゃ」



むかし、大お節ぶしの鼻はなのあたり、大お富ぶ土と小こ富ぶ土との丘きゅうりょう陵りょうがあり、
大だい蛇じゃが住すんでいた。

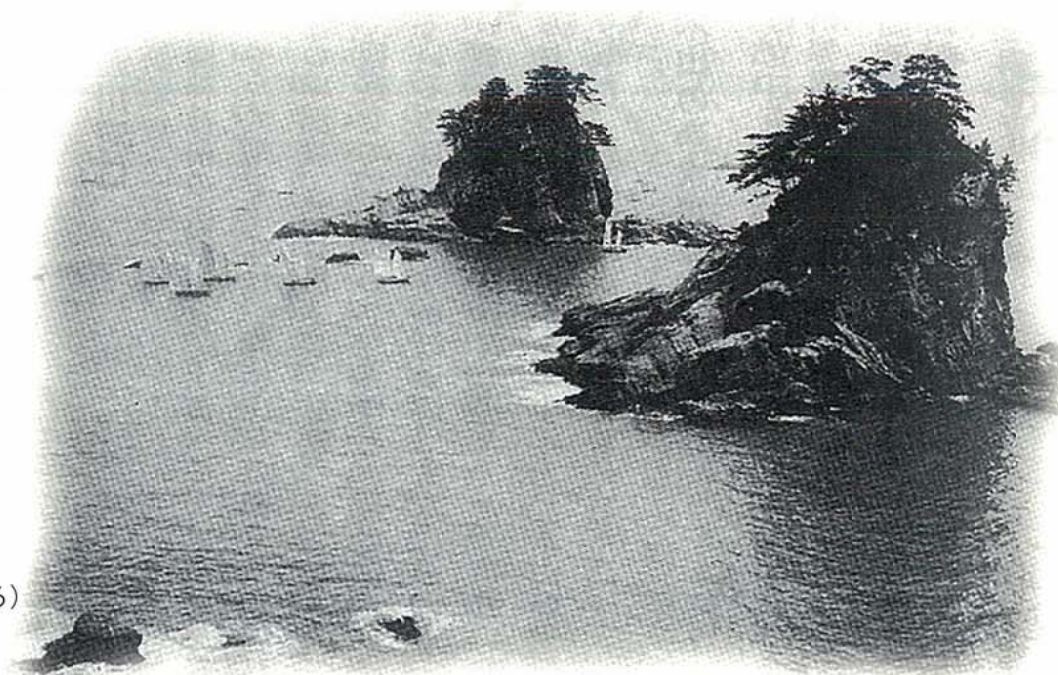
夕ゆう方がた、西にし之の野のの山やまに日ひが落おちるころ、大お節ぶしの鼻はなから西にしへ向むけて、
銀ぎんのうろこを西にし日びに当あてて、

眼めを光ひからせ泳およぐ大だい蛇じゃの姿すがたを見みると、

漁りょう師したちは口くち々ぐちに、

「明あした日は魚さかながつかるっど（つれるぞ）!」と、

吉きつちよう兆よろこを喜よろこんだそうだ。



松島（昭和15年ころ）



……その目と鼻の先に、松島がある。

飢肥の殿さんが、広渡川を下った弁甲の筏が大節の鼻を
 よう回らんで（うまく回れないで）多くの死者を出し、
 堀川を掘ることを思いついたように、
 このあたりはむかしから難所だった。

霧が濃いときや、未明のときに漁に出ようとするど、
 どこからともなく妙なる口笛が海面を渡って
 聞こえてきたという。

そうすると漁師たちは、

「天狗が呼んぢよる

（呼んでいるよ）」と恐れ、

天狗に舟を引き込まれまいと

帆や舵を操ったという。



堀川の話は、
 P.68～73を見てね！

川かわにまつわるならわし



集落しゅうらくを守る、水神様すいじんさま。

北郷町大藤きたごうちょうおおふじ しゅうらくの集落は、広渡川ひろとがわの東ひがしにあります。北郷温泉きたごうおんせんの近くちかといえば、わかる人も多おほいでしょう。

集落しゅうらくから広渡川ひろとがわをめざすと、県道けんどうの向こう側むに河川敷がわかせんじき（河原）が広ひろがっています。そこにひっそりと、でもどっしりと、水神様すいじんさまはたたずんでいます。

水神様すいじんさまが守まもるのは、水みづに関する全すべてのこと。農業や漁業のうぎょう ぎょぎょうのための用水ようすいが枯かれませんか、洪水すいがいの被害ひがいにできるだけあいませんように、川かわで安全あんぜんに遊あそべますように、…… 毎年7月に、集落しゅうらくをあげておはらいをします。



水神様すいじんさまのまつり方は、

いろいろあるようです。

家庭かていの神棚かみだなが、そのまま水神様すいじんさまとしてまつられていることも多くあります。

また、川かわだけでなく、海うみに出る漁師りょうしの間でも、海うみに刃物はものを落おしたら、水神様すいじんさまに飴あめをお供そなえするように……

という風習ふうしゅうがあったといひます。

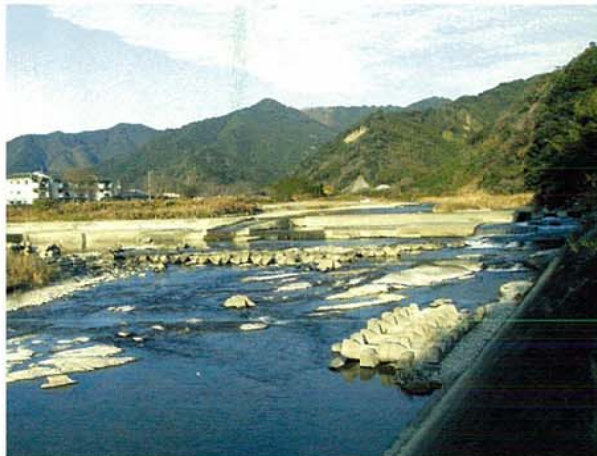
水に、困りませんように。

大藤井堰のそばに建てられた「ほこら」。
地元の方が手入れを欠かしません。井堰とは、川の水をせきとめて、そこから掘られた水路に水を流すために作られたものです。その水路の先には、大事な農地があり、昔はその水で生活の全てをまかなっていました。人々の水を大切に思う気持ちが、伝わってくるようです。



大藤井堰

場所は北郷町役場のすぐそばです。大藤集落の農地に水を供給する目的で作られたから、このあたりの地名でなく「大藤」の名前が付けられています。(昭和25年(1950)完成)



日南市の歴史に詳しい 長友禎治さんの話

水神様は、どこにまつられているのでしょうか。

このあたりで特別に調べられたことはないようです。

大藤のほかには、日南市東郷にあることがわかっています。

昔の人は、水の大切さ、価値、恐ろしさといったことを、

毎日の生活の中で深く感じていました。

水を神様として扱う考え方は、現代の私たちにとっても、

参考になるのではないのでしょうか。

川かわにまつわる歌うた その一

校こう歌かにうたわれる

吾田小学校校歌

作詞／八波則吉 作曲／田村虎蔵

一

酒谷川の清き水
 さきは淵瀬と 変れども
 変らぬものは 従順の
 水に映れる 姿かな

二

小松の峰の うるわしき
 四季の眺めは 変れども
 変らぬものは 動きなき
 山に宿れる 自治のさま

三

山と川とは あいよりて
 協和の美をば なせるなり
 われらもつとめ つつしみて
 この山川に ならわなん

餂肥小学校校歌

作詞／神戸雄一 作曲／園山民平

一

山あきらかに水清く
 郷土のめぐみ受けつぎて
 かがやく偉人生まれし地
 小松の峰の白き雲
 草みどりなる城跡に
 たてるまなびやわが母校

二

いざ手をとりて学びなん
 学びのページ新しく
 われらの前に開けたり
 聞けまなびやに知をみがき
 文化をきづく若き子の
 つどい楽しき歌声を



かわ やま し ぜん
川・山・自然

あぶら つ しょう がっ こう こう か
油津小学校校歌 作詞／矢野不二男 作曲／園山民平

一
くろ しお たか うみ
黒潮の高なる海に
ほのぼのと あさ ひ
朝日はのぼる
あたし ひかり き ぼう ひかり
新しきこの光 希望の光
きょうも 学ばん 油津健児
きょうも みたえん 油津健児

二
つ みね にじ た わた
津の峰に虹立ち渡り
ゆう や ひろ と なが
夕焼けて 広渡は流る
うる すがた こころ すがた
美わしきこの姿 心の姿
きょうも みがかん 油津健児
きょうも みたえん 油津健児

三
あお そら くも あ
青空に 雲わき上がり
しお かぜ だい ち
潮風は大地をたたく
たくましきこの力 伸びゆく力
きょうも みたえん 油津健児

きた ごう しょう がっ こう こう か
北郷小学校校歌 作詞／布施 武 作曲／川口 晃

一
はな たて まき ば みどり よ
花立の 牧場の緑が呼んでいる
はち の す かわ
蜂之巣の 川のせせらぎが招いている
さ あ 行こう みんなで築こう
あか がっ こう きた ごう しょう がっ こう
明るい学校 北郷小学校

二
ごう の ほら おお ふじ いた や さが ちと
郷之原 大藤 板谷 坂元と
まな れき し つ いま
学びやの 歴史を継いで 今ここに
ちから つよ き ぼう も
力強く 希望は燃えて
たの がっ こう きた ごう しょう がっ こう
楽しい学校 北郷小学校

三
やま み すぎ こ だち かんが
山を見よう 杉の木立に考えよう
あお そら しろ くも かた
青い空 白い雲とも語ろうよ
みらい は そだ
未来への 羽ばたき育てる
みんなの 学校 北郷小学校

あが た ひがし しょう がっ こう こう か
吾田東小学校校歌 作詞／山村廣義 作曲／根井 翼

一
みどり すぎ
緑の杉のすくすくと
なお すがた
直き姿のそのままに
みらい ひとみ す
未来を 目指す 瞳澄む
いま そう ぞう い き も
今創造の 意気燃えて
かがや あが た ひがし しょう
輝く 吾田東小

二
とわ か こまつ やま
永久に 変わらぬ 小松山
お お みね あお
雄々しき 峰を 仰ぐとき
つよ あか ゆめ わ
強く 明るき 夢が 湧く
しん り もと
真理を 求め ひとすじに
の あが た ひがし しょう
伸びゆく 吾田東小

川かわにまつわる歌うた

その二

校歌こうかにうたわれる

東郷小学校校歌 とうごうしょうがっこうが 作詞/黒木清次 さくし くら きせいじ 作曲/海老原直 さつきよく えびはら すなお

一
つらなる山やまなみ 青あおい空そら
みどりの穂ほさき 陽ひにそろえ
すくと伸のびゆく 若わか杉すぎを
友ともとしはげむ この窓まどべ
東郷東郷 とうごうとうごう わが学まなびやは 東郷小 とうごうしょう
東郷東郷 とうごうとうごう わが学まなびやは 東郷小 とうごうしょう

二
広渡ひろとの川かわの 水みず清きよく
ゆたかにひらく 田たのみどり
風田かぜたの浜はまに海うみよべば
大おおきな希き望ぼうが 胸むねにわく
東郷東郷 とうごうとうごう わが学まなびやは 東郷小 とうごうしょう

三
小松こまつおろしの 朝あさ夕ゆふも
いまさきわたる 山やまざくら
この国里くにさとの よき人ひとと
真まこと理りをたづね いざゆかん
東郷東郷 とうごうとうごう わが学まなびやは 東郷小 とうごうしょう

吉野方小学校校歌 よしのかたしょうがっこうが 作詞/武田良守 さくし たけだよしもり 作曲/川口晃 さつきよく かわぐち あきら

一
小松こまつのふもとひろびろと
緑みどりの野山やま さちおおく
みのり豊ゆたかな ふるさとの
わたしたちが育そだっていくよ
楽たのしい小学校 しょうがっこう 楽たのしい小学校 しょうがっこう

二
古ふるい歴れき史しの学まなびやに
先せん生せい父ふ母ぼの まごころの
親したしい教おしえ 清きよい愛あい
わたしたちが学まなんでいくよ
うれしい小学校 しょうがっこう うれしい小学校 しょうがっこう

三
希き望ぼう、思おもい出で、胸むねにひめ
力ちからのかぎり 伸のびすすむ
強つよく正ただしく ほがらかに
わたしたちが巢すだ立だっていくよ
親したしい小学校 しょうがっこう 親したしい小学校 しょうがっこう

かわ やま し ぜん
川・山・自然

さくら が おか しょう がっ こう こう か
桜ヶ丘小学校校歌

さくし なかむら ちへい さつきよく そのやまけんじ
作詞／中村地平 作曲／園山謙二

一

あさかぜ じょう みね
朝風わたる城の峰
の おびすぎ あお
伸びる飢肥杉 仰ぎみて
つよ きた
強く鍛える このからだ
みんなも伸びる元気な子
さくらが おか こ
桜ヶ丘のよい子ども

二

くろ しお あぶらつ こう
黒潮のぞむ 油津港
なみ かがや まひる ひ
波に輝く 真昼の陽
ひろ おお こころ
広く大きい この心
みんな清らかに 明るい子
さくらが おか こ
桜ヶ丘のよい子ども

三

う た はた たそが
熟れた田畑は 黄昏れて
こうぼ まち ゆう
工場の町に 夕けむり
たゆまぬ学び この希望
みんなははげむ素直な子
さくらが おか こ
桜ヶ丘のよい子ども

くろ に た しょう がっ こう こう か
黒荷田小学校校歌

さくし やのふじお さつきよく えび はら すなお
作詞／矢野不二男 作曲／海老原直

一

くも あ ぐろ に た
雲わき上がる 黒荷田の
せん だち やま こ
仙立山に のぼる子は
みそら にのびる 杉のよに
げん き われら
元気な我等をつくるのだ

二

きり た ぐろ に た
霧立ちのぼる 黒荷田の
きのこ たに こ
茸の谷に くだる子は
かわち にすめる みず
河内にすめる 水のよに
きれいな郷土をつくるのだ

三

くろ に た
虹たちわたる 黒荷田の
この学びやに 学ぶ子は
くろ せ さ はな
黒瀬に咲ける 花のよに
あか にほん
明るい日本をつくるのだ

さか たに しょう がっ こう こう か
酒谷小学校校歌

さくし やのふじお さつきよく えび はら すなお
作詞／矢野不二男 作曲／海老原直

一

お すず やま そら たか
男鈴の山の 空高く
かがや たいよう
輝きわたる 太陽に
さくら はな
桜の花の あかあかと
あさ きぼう わ
朝の希望が湧いてくる

二

さか たに がわ かげ う
酒谷川に 影浮かぶ
みどりの木々や 白雲に
なが みず
流れる水の さらさらと
きよ こころ わ
清い心が 湧いてくる

三

やま やまたか たに ふか
山々高く 谷深く
あらし しも こ
嵐や霜を しのぐ子に
の 伸びゆく杉の すくすくと
つよ ちから わ
強い力が 湧いてくる



川かわにまつわる歌うた

その三

にち なん し か
日南市歌
 さくし なかむら ちへい ながみね ひろし
 作詞／中村地平・長嶺 宏
 さつきよく ふなむら とおる
 作曲／船村 徹

1. 見はるかす 紺青の海
 なみ 波とどろ いわ 岩の高さよ
 とおき代の 伝えかなしく
 うど 鶺鴒の宮 かもめむれとぶ
 わが日南市 うるわしき郷土
2. 杉木立 におう山なみ
 かげひたす 水の青さよ
 たいへい 踊あえかに
 おびじょうし 夕日いさよう
 わが日南市 なつかしき郷土
3. 煙たつ パルプの工場
 きこえくる 歌の若さよ
 うみ 海ひらけ 船の往来に
 あぶらつこう 明日へ伸びゆく
 わが日南市 あたらしき郷土

きた ごう ちょう か
北郷町歌
 さくし おち あいまさ ゆき
 作詞 落合正行
 さつきよく えび はらすなお
 作曲 海老原直

1. 南の風は さわやかに
 こまつ やま 朝はれて
 あお ひか 照りはえる
 すぎ しん め 明るさよ
 きよ 清くのびゆく ふるさとの
 あたら まち きたごうちょう
 新しき町 北郷町
2. 猪八重の瀧 とどろけば
 ひろ と 水は澄み
 はち すぎょう ひ 陽はあふれ
 おどる わかあゆ 背がひかる
 きぼう 希望あふるる ふるさとの
 やくしん まち きたごうちょう
 躍進の町 北郷町
3. 夕映えはえる 犬ヶ城
 よく や 見わたせば
 みのる 果実も 夕やけて
 まち しず 町は静かに 更けてゆく
 ゆめ 夢もゆたかな ふるさとの
 へい わ まち きたごうちょう
 平和なる町 北郷町

山の神祭りの歌 “ヤマンカンマツりん歌”

しょう ご く かくげつ にち やま かんけいしゃ やま かん かんしゃ ろうどう あんぜん
 正・五・九の各月の16日には、山の関係者は山の神に感謝し、労働の安全
 などを祈願して山の神祭りを行う風習が今もあります。
 この歌は、その時に歌われるものです。(歌詞は、一つの例です)

- ヨイヨイヨーイ
- 一、 うれしめでたの若松様よ 栄える枝も 葉も繁る
 - 二、 飴肥杉山が 三年やれば 角ある石も 丸くなる
 - 三、 おがも軽かれ 切る木もよかれ 都の浜で 値もよかれ
- (も一つおまけに) ヨイヨイヨーイ (各番共通)
- べん こ 弁甲もよかれや ぼりかわ 堀川もよかれ みなとあがらつ 港油津 えーえ 尚よかれ
- 「おが」=杉を切るのこぎり

北郷小唄

作詞／野内忠良
作曲／楠原照章



第2次世界大戦直後は、世の中が力を失ったようでした。そこで、北郷町で社会教育主事という役職についていた野内忠良氏が、地域の人々を元気づけ、また地元のことを好きになってもらおうと作詞し、宮崎交通の楽団長だった楠原照章氏に頼んで作曲してもらいました。北郷は優れた観光地を持っており、この宣伝も同時にねらった企画でした。

一、 ハアー 北郷よいとこ、ヨイトサ、
春は一の瀬河原の桜 水の流れに筏を浮かべ、
上と下との花見酒、
それ一度来やんせ、泊まりやんせ、ホンニ 北郷はよいところ

二、 ハアー 北郷よいとこ、ヨイトサ、
夏は蜂の巣流れで涼み、鮎を釣りつり瀬を下る、
セゴシ料理で、舌つづみ
(以下同じ)

三、 ハアー 北郷よいとこ、ヨイトサ、
秋は紅葉の猪八重滝に、カジカ、オシドリ、鳩雉兔、
ハマグリ岩屋に 群れ遊ぶ
(以下同じ)

四、 ハアー 北郷よいとこ、ヨイトサ、
冬は猪椎茸がりに、蘭の花咲く小松山
帰りや 宝の山のさち
(以下同じ)

五、 ハアー 北郷よいとこ、ヨイトサ、
何処へ行っても飴肥杉弁甲
七尋 八尋が無尽蔵
ドント 切り出しゃ 五万石
(以下同じ)

※石…ここでは木材の体積の単位です。
断面が縦1尺・横1尺、長さ10尺

(1尺は約30センチメートル)の
木材を1石としています。

メートル法に直せば
約0.28立方メートルです。ちなみに、
木材以外の体積を測る場合は
1石が約0.18立方メートルと異なります。
重さの単位として使われる
こともあります。



川にまつわる短歌・俳句

歌人とは、短歌を詠むことを専門とする人のことです。西行が日本各地を旅して「山家集」を著したように、昔から歌人はよく旅に出て、足跡のよ

うに歌を残していきました。広渡川・酒谷川のあたりには、歴史に残るような歌人が何人も立ち寄りま

した。その時に彼らが詠んだ中からいくつかを紹介します。ゆっくり、味わってください。その人と時代を思い浮かべながら……。

【若山牧水】

船はてて
上れる國は満天の
星くづのなかに
山白ひ立つ



若山牧水は、明治18年(1885)

宮崎県生まれの、日本を代表する
ような歌人です。彼の生まれた家
の真下には溪流があり、ペンネー
ムの「水」の字はこの溪流の水や雨
を由来としています。彼は、22歳
のときに夏の日南を訪れました。

今の串間市にいた父を訪ねる途中、
油津港で船を下り、そこで詠んだ
のが上の歌です。

見上げれば満天の星、そして夜空
の下辺をふちどるみずみずしい山
並み。……この歌は彼の作品の中
でも名作として評価されています。

【長塚節】

ころぶせば
枕にひびく浅川に
芋洗ふ子もが
月白くうけり



長塚節は、明治12年(1879)茨城

県生まれです。小さい頃から学業
に秀でていたのですが、体が弱く、
苦勞したようです。今も天才歌人
と称えられる彼は、旅先の福岡に
て37歳の若さで亡くなるのですが、
この歌はその直前にこのあたりを
旅した時のものです。

鉄肥の今町橋のそばに宿泊し、せ
せらぎの音を聞きながら詠んだ歌。
この情景も夜ですが、こちらは酒
谷川の清流を描きました。想像す
る私たちまで、耳を澄ませてしま
いそうです。

「芋洗ふ子もが」…芋を洗う娘がいたら
いいなあ、という意味です。宿で作って
いる芋に心をひかれて詠んだ歌です。

【種田山頭火】

種田山頭火は、明治15年(1883)山口県に生まれますが、その家庭は度重なる不幸に見舞われました。特に11歳の時の母親の自殺は、彼の心を激しく揺さぶったと言われます。苦悩する彼はやがて出家しますが、一か所に落ち着くことはなく、旅を重ねました。この川のあたりを訪れたのは昭和5年の秋のことでした。

〈一〉

水の味も身にしむ秋となり



〈二〉

明月の大綱をひっぱりあつてゐる

〈三〉

誰もゐないでコスモスそよいでゐる

- 〈一〉 彼は飢肥の宿で、「この宿の老翁は偏屈者だけれど、井戸水は素直だ、夜中二度も腹いっぱい飲んだ」と書いています。飢肥の酒蔵が良質の地下水を使い続けていることからわかるように、水にはうるさかったという彼の舌を楽しませる味だったのでしょうか。水の味も、と言っている彼は、他の何から秋を感じ取っていたのでしょうか、気になりますね。
- 〈二〉 句自体はなんだかふつうの文のようですが、「(旧暦)八月十五夜は飢肥、油津、大堂津あたりでは全町総出で綱引をやる、興味ふかい年中行事の一つだと思ふ」と記しており、当時のお祭りの貴重な記録となっています。飢肥では、本町橋が木橋で作られていて、そこに丸太を引っかけて太い綱を編んだとも伝えられています。(綱引きの行事は、P.104を見てね)
- 〈三〉 一面のコスモス畑なのでしょう、それとも道ばたに数本が咲いていたのでしょうか。誰もいない、誰の声もしない、そんな中でただコスモスの花が揺れる。何気ない秋の光景に感じた寂しさが伝わってくるようです。

川かわのまわりで育そだった人ひと々びと

飼お肥ぐら西郷しよと呼へいばれた 小倉処平



小倉おくら処平しよへいは、小村こむら寿太郎じゆたろうより9歳上さいうえの、
振徳堂しんとくどうの先輩せんぱいです。小村こむらとは先生せんせいと生徒せいと
として出で会あいました。小村こむらの才能さいのうを見抜みぬ
いた彼かれは、困難こんなんな状況じゆうきやうの中なか、長崎ながさき・東京とうきやう
への留学りゅうがくを實現じつげんさせました。
西郷隆盛さいごうたかもりと比ひ較かくされる程ほど決断力けつだんりよくと行こう動力どうりよく
に富とみみががっっしりした体たい格かくを備そなえた人ひとで、
人望じんぼうも厚あつかったのですが、西南戦争せいなんせんそう（明治めいじ
10年ねん（1877））に参さん加かし、亡なくなりました。
多おほくの人ひとが宮崎みやざきの重じゆう要ような人材じんざいの早はやい死しを
悲かなしんだそうです。

めいじがいこう いじん
明治外交の偉人 小村寿太郎



めいじじだい れきし がっこう なら かならず とう
明治時代の歴史を学校で習えば、必ず登
じょう
場するのが小村寿太郎です。教科書には、
「ポーツマス平和条約を結ぶ」「関税自
しゅけん かくりつ
主権を確立させる」のような、大きな見
だしが並んでいます。

しかし、かれがなくなって90年余りたった
いま いじん かれ
今も偉人としてたたえられるのは、彼の
ぎょうせき じぶん
業績が、自分のためでなくひたすら世界
の平和と国の発展を目指したものであ
ったこと、そしてその達成のためには彼の
しょうじき ところ たにん しんらい
正直でまっすぐな心により他人の信頼を
え
得ることが欠かせなかったこと……

それをみんな知っているからではないで
しょうか。

あんせい ねん (1855) いま にちなんし おび う
安政 2年 (1855) 今の日南市飢肥に生まれる。

ぶんきゆう ねん (1861) しん とくどう にゅうがく
文久 元年 (1861) 振徳堂に入学する。

めいじ ねん (1869) しん とくどう そつぎょう ながさき りゅうがく
明治 2年 (1869) 振徳堂卒業、長崎に留学する。

めいじ ねん (1875) だいがく りゅうがく
明治 8年 (1875) ハーバード大学に留学する。

めいじ ねん (1880) き こく いま ほう む しょう しゅうしよく
明治 13年 (1880) 帰国、今の法務省に就職する。

めいじ ねん (1893) しん こく こう し かん さん じ かん しん こく ちゅうこく むかし すがた
明治 26年 (1893) 清国公使館参事官にばってきされる。(清国は中国の昔の姿)

めいじ ねん (1901) がい む だいじん しゅうにん
明治 34年 (1901) 外務大臣に就任する。

めいじ ねん (1905) へい わじょうやく むす
明治 38年 (1905) ポーツマス平和条約を結ぶ。

めいじ ねん (1911) かん ぜい じ しゅけん かくりつ かな がわけん な
明治 44年 (1911) 関税自主権を確立する。神奈川県で亡くなる。

それは「誠」の一字につきると思う。
もし私に万が一長所があるとすれば
私が人よりすぐれたところがあるとは思わない。
私が学生に望むことは「誠」である。